

「真のお父様」

皆さん、こんにちは。

今日は、「真のお父様」という題目で、説教を致します。

はじめに聖書を拝読します。

あなたの若い日に、あなたの造り主を覚えよ。悪しき日がきたり、年が寄って、「わたしにはなんの楽しみもない」と言うようにならない前に、
また日や光や、月や星の暗くならない前に、雨の後にまた雲が帰らないうちに、そのようにせよ。

（『旧約聖書』伝道の書 第12章 1～2節）

今日は、真の父母様ご自身が学生時代を振り返られたみ言を中心に、真の父母様が皆さんと同じ学生時代をどのように過ごしておられたのかを学んでいきましょう。

まず、お父様の学生時代について学んでいきます。

真のお父様の通われた学校

真のお父様は、故郷である韓国の定州で1934年の14歳の頃、定州私立五山普通学校に入られました。そして、1年後の1935年に定州公立普通学校に転校し、3年後に卒業されました。お父様がイエス様に霊的に出会われ、メシヤとして公生涯を出発されたのもこの頃です。

そして、1938年、18歳の頃にソウルの京城商工実務学校電気科に修学されます。お父様はメシヤとしての使命を果たしていくための準備時代を過ごしておられました。

これらの頃を振り返られたお父様のみ言を紹介したいと思います。本当にたくさんおエピソードがあるのですが、時間の関係で今日はその一部を紹介します。

まず、定州におられた頃のお父様のお話です。

定州学生時代のお父様

皆さんは今、自分なりに多くの夢をもっていることでしょう。石垣を積もうか、何々の壁を積もうか、と。先生にも夢が多くありました。三つ以上の学位を取れなければ生きていけないと、刀を腹に当てて決心した人なのです。先生の性格は、三つ以上の学位を取らなければ、誰にも教えず何も話さない人なのです。

先生は欲張りなのです。「私が生きている間に、博士を三つ以上取らなければ死ぬ」と考え

た人なのです。

(『真の御父母様の生涯路程①』 p.104)

先生は少年時代を、大韓民国の自主的国家圏内で育つことができず、日本の圧制圏内で、日本の統治下で育ちました。二十五歳までそのように育ちました。ですから、徐々に世の中を知るようになって、若者として過ごすことができる、難しいすべての事情を測定できる、そのような重要な時期に、国のない民として育ったので、その時代が回想されます。

(中略)

私がよく考えてみると、問題は私たちが相手を知らなければならないということでした。相手を細密に知らなくては、戦おうにも対策を立てることができないという気がするのです。それで定州普通学校(注・公立普通学校)に、編入試験を受けて、四年に入りました。そこに入って、日本語を流暢に話すようになって卒業をしたのです。そのような過程を経ながら、信仰の道だとか、人生の根本問題だとか、難しいすべての問題を考えるようになったのです。

(『真の御父母様の生涯路程①』 p.107~108)

皆さん、灯火を知っていますか。油に火をともして勉強したことが、きのうのことのようです。二時、三時、夜を明かして勉強すれば、母と父は、「もう寝なさい。体を壊してはいけない」と言いました。いつもそうだったのです。その時、私が一番友達としたのは夜の虫たちでした。夏には、夜の虫を友達としたのです。このようにでんと座って、二時、三時までいたのです。静かな夜に……。田舎の夜は、本当に静かなのです。虫たちが月夜に鳴くその声は、とても神秘的なのです。山をさっと歩き回っていたことが、きのうのことのようです。

(『真の御父母様の生涯路程①』 p.109)

私がこの道を歩み出すようになった時は、皆さんよりもっと年齢が若い時です。二十歳前に、この道を出発したのです。その時は天真爛漫な時代でした。良い何かがあれば、その良いものを全部自分のものにしたいし、また、村に少し風変わりなものがあれば、それを探してみたいし、関係を結びたい、そのような心がとても強い時でした。

そのような時代に、この途方もない天のみ旨を知り、天的な大命を受けた、その日がありました。そして、この途方もなく大きいことを、神様が約束すると同時に、それを感じ、それを願いとして行かなければならない自分は、その大きいことをそのまま受け入れて、そのままそれをのみ込むことのできる自分自身にはなっていないことを知りました。支えるにはあまりにも大きく、それに従うためには内外にすべてのものを備えなければならぬ自分自身の責任が、どんなに大きいかということを痛感せざるを得ませんでした。

(『真の御父母様の生涯路程①』 p.124)

このように、お父様は大きな夢を持って、民族や国に責任心情を感じながら、一生懸命に勉強をされていました。そして、イエス様からメシヤの使命を託されてからは、その責任を全

うするための準備を出発して行かれたのです。
では次に、ソウルに行かれてからのお父様のお話を紹介します。

ソウル学生時代のお父様

先生は学生のころ、自炊をしていました。ちょうど皆さんの年ごろにです。故郷を離れて、ソウルで学生として勉強していた時、一番最初の休みの時には、とても故郷が懐かしくなるのです。分かりますか？故郷が懐かしくて、休みになれば、飛んで帰りたいのです。しかし先生は故郷には帰りませんでした。一人で自炊をしながら、何をしていたのでしょうか？他の人々は故郷に帰ったけれども、私は実践時代の準備をするために忙しかったのです。

また、おばさんたちが準備してくれる御飯も私は食べませんでした。なぜかというと、私の行く道においては、女性なしに一人で生きていかなければならないことを知っていたからです。ですから、私にできないことは何もありません。服もつくれるし、帽子もつくれるし、できないことは何もありません。男が一度決心して、それを実践に移す時は、独り暮らしをしながらも、全部できなければならないのです。

（『真なる子女の道』 p.91）

謙遜な人、自分に実力があっても驕慢に振る舞わない人がいます。そのような人は、むやみに触れられないというのです。何だか分からず、その人から威圧感を感じるというのです。その人には主管性が宿っているのです。先生も昔、そのような何かがありました。先生は、学生時代にはあまり話をしませんでした。学校に行っても、べらべらと話したりはしなかったのです。一日中話をしない日もありました。それで同級生たちが私に、本当に気兼ねをしたのです。学校の先生より、もっと気兼ねをしました。かといって私は、彼らを恐喝したり脅迫をしたこともなく、げんこつを振るったこともありません。それでも彼らは、私にむやみに接することができませんでした。

（『真の御父母様の生涯路程①』 p.138～139）

中学校時代には、清掃を私がみなしました。全学校を私が先頭に立って愛したい心があるために、全学校を代表して私が掃除をしようと考えたのです。そのような時は、他人が助けてくれるのは嫌だというのです。一人でやりたいのです。

（中略）

その時間は、心と楽しむ時間なのです。世の中から見れば、孤独な立場のようですが、心と友達になる時間なのです。なすべきことをして、座って瞑想でもしてみなさい。深い祈祷の境地に入っていくのです。他人の分からない深い世界に入っていくのです。そのようなことが必要なのです。

（『真の御父母様の生涯路程①』 p.139～140）

私の学生時代に、私の質問に返答できなくて逃げていった先生が、どんなに多いか知って

いますか。私はしきりに質問するのです、「物理学に出てくる公式や定義を誰が決めたのですか。私は信じられない。私に分かるように説明してください」と。そのような人なのです。

自分が検証する前には、どんなことも信じませんでした。学校で数学の先生が公式を教えてください、それを中心として、先生をやり込めた人なのです。誰がこのような公式を作ったのか、というのです。私が作る前に作ったので気分が悪いのです。私が作るべきなのに、と（笑い）。暴いては追い詰め、暴いては追い詰め、追求し、また追求するというようなことをしたのです。適当にはありません。

（『真の御父母様の生涯路程①』 p.140～141）

私には力があります。一人、二人くらいは軽く相手にする能力もある人です。また、私がしてしなかったスポーツはありません。数えの二十二歳の時まで、夜昼なく体のために運動をしました。

ボクシングもしました。昔の日本の家のようなものは力を込めて打てば、一発で壊れるのです。

（中略）

相撲をしても負けません。サッカーでも有名です。このような体格をしていても速いのです。昔、若い時には鉄棒もして、いろいろな運動で鍛練をしておいたのです。

（中略）

体の訓練をすれば、精神的世界の土台が既に位置を占めるようになるために、流れていかない男になるのです。そのような武術を考案して、外的にそれを準備しておかなければなりません。

（『真の御父母様の生涯路程①』 p.144～145）

先生がソウルでの学生時代に、皆さんのような年齢の時には、昼食を食べずに暮らしました。御飯がなくてそうなのではありません。腹のすいていた父母の歴史があれば、腹のすいていた父母の事情を知らなければなりません。腹のすいた立場で、その父母に孝行することができなかった自身をとがめ、腹のすいたその時代に孝子になることができる自らを準備しなければならないのです。

空腹でなければ、神様が分からないのです。私はそのように考えたのです。腹のすいた時間が一番神様に近いのです。

（中略）

御飯を恋しがると同時に、民族を恋しがる道を行ったのです。「御飯より民族をもっと愛さなければ、国をもっと愛さなければ」と思い、故郷を離れソウルに来ていながら、昼食を食べませんでした。ポケットにお金がなくて、そうなのではないのです。お金があれば、かわいそうな人々に分けてあげたのです。ですから断食を頻繁にしました。三十歳まで、昼食を食べませんでした。一番腹のすいた時です。家を離れて、ずっと二食主義でした。

（『真の御父母様の生涯路程①』 p.154～155）

私は、日曜学校の学生たちをよく教えたのです。今は話をおもしろくできませんが、その時はおもしろくしたようです。私が涙を流して話せば、毎回、全員わんわんわんわん泣いて大騒ぎです。一度泣けば嫌がって、もう泣かせないようにと願うはずなのに、「またしてほしい」と言うのです。付きまといながらです。そのように話してあげたりしました。

（中略）

先生は、今までそのようにしてきたのです。幼な子にも侍り、小学校の生徒にも侍り、中高生にも侍り、中年にも侍ったのです。彼らに対して私が一番愛する人のように侍ったのです。お母さん、お父さんのためにするよりも、もっと侍ったのです。食べるものがあれば、彼らにあげようと包んで行ったのです。

（中略）

どのような環境でも、心をよく合わせてあげるのです。おばあさんと友達になり、おばさんと友達になり、子供と遊んで友達になります。みなにそうするのです。遊ぶ時は幼稚園の先生のようになって、誰よりも愛する心をもてば、誰も忘れることができません。今もそうです。

（『真の御父母様の生涯路程①』 p.175～177）

この頃のお父様のモットーが「宇宙主管を願う前に自己主管を完成せよ」でした。メシヤとしての使命を全うするために、厳しく自分自身を律されて、精神的にも肉体的にも技術的にも自己を極限まで鍛えて行かれたのです。

真の父として歩まれたお父様

このように、お父様は天真爛漫な少年であったりしましたが、神様と出会い、人類のメシヤ、真の父母として立たれるようになってからは、そのために必要な訓練を重ねられ、私たちが知る本当に堂々とされたお父様のお姿になっていかれました。

自分のために今を生きるのか、他者や国、世界のために未来に向かって準備するのかで、学生時代の過ごし方は全く変わってきます。

皆さん、真の父母様の学生時代の生き方を倣いながら、志を持って日々の学生生活を送ってください。

最後に、お父様が皆さんに向けて語られたみ言を紹介して、説教を終わります。

皆さんに今、先生を思う心があれば、先生のように努力しなければなりません。準備するのは。実践時代に備えて準備をします。軍事訓練は、実戦の舞台で敗者にならないために行うのです。それと全く同じことです。このような道理は、皆さんの生涯において必要なことなのです。それをはっきりと知らなければなりません。

(中略)

皆さんの行く道は忙しいのです。皆さんは実践時代に備えて、準備が忙しいことを知って、少しでも先生のことを思うならば、「先生の行かれる道を、私たちが早く引き継いで、新しい世界の基盤を拡大する者になろう」と、ひたすら準備しなければならないのです。頼みますよ。

(『真なる子女の道』 p.88)

今日は、「真のお父様」という題目で説教を致しました。以上で説教を終わります。ありがとうございました。